イスラームの共同体意識

後藤　明

人間――群れをつくる動物

地球上にはさまざまな生物が生存している。そのなかでの人間、それは生物学的にはヒトというのだが、それは群れをつくる動物の一種である。熊のように、原則として単独で行動し、繁殖時にだけカップルをつくったり、哺乳期にだけ母子で行動するような動物種もあるが、ヒトはそうではない。馬や牛、羊のように、つねに群れている動物、それがわれわれ、人間なのである。

生物学で、人間に近い仲間、とされるのは霊長類、すなわち猿の類である。猿にもいろいろあるが、大部分の猿の仲間は、群れて行動する。猿の群れを、猿の社会とみなしてそれを研究する猿学が、近年の日本で急速に発展した。猿学にたずさわっている研究者は、猿の群れを人間の群れの、すなわち猿の社会を人間の社会の原初的な形態ではないかとひそかに考えているのではないかと思う。人間も、数十万年、あるいは数百万年前は、ある種の猿のようなものではなかったか、と考えているのであろう。

それはともあれ、人口五十億人を越えたと想像されて

いる今日の人間は、猿学からはほど遠い、複雑極まりない群れを、すなわち社会を形作っている。猿の群れは単純である。群れのなかにはボスもいるし、それなりに階層もあるようだが、一匹の猿は特定の群れに属しているだけで、複数の群れに属しているわけではない。はぐれ猿もいるようだが、群れの個体数を数え、群れの数を数えれば、一定地域内のおおよその猿口は推計できる、というわけだ。人間の場合はどうであろうか。

共同体論

人間の群れを共同体、ととらえる考えが社会科学の一部にある。そのような考えでの共同体は、多くの場合、猿の群れと大差ない。共同体の内部にはボスもいれば、それなりの階層もある。そして一人の人間は原則として何らかの共同体に属すのだが、ひとつの共同体にしか属さない。一人の人間は、ひとつの共同体のなかで、人生の大部分を過ごすのである。共同体のなかで仲間はずれにされることは、生きていく基盤を奪われることを意味してしまうのである。このような性格の共同体を想定して、共同体内の人間関係のありようを考察してみようとする学問があるのである。

われわれ、現在の日本で暮らす人間の一人ひとりは、実際には、多くの集団の構成員となっている。私の場合なら、日本国の国民で、東京都民で、東久留米市というさして有名ではない市の市民で、何とかという町内会のメンバーということになる。日本国の国民であるという私の立場は、実際には、重層的に存在しているいくつもの集団・社会・組織のメンバーであることによって支えられているのである。むろん、日本国の国民だけが私の立場ではない。私は、世間的には東京大学教授という肩書きで通用している。この肩書きは、私の職業上の重層的な身分の中間的な位置を示している。大きくは私は、国家公務員である。そしてその一部である文部省に所属する教官である。そして文部省が一括して管理している国立大学のなかの東京大学に所属し、またそのなかの東洋文化研究所という組織に所属し、またそのなかの西アジア部門に所属している。私はまた職業上の身分に関連して、東洋文化研究所の職員の労働組合の一員であるのだが、それは同時に、東京大学職組の一員であることを意味し、また全国の大学職組の連合組織である全国大学高専教職員組合の一員であることになり、さらにその上部の組織の一員であることになる。私はまた、私や妻や子供よりなる家族の構成員であるし、あいまいな存在ではあるが法事などがあると集まる親族の一員でもある。私はまたいくつかの学会のメンバーでもあるし、卒業校の同窓会のメンバーでもあるし、という具合に、私の名が載っている名簿を管理しているいくつもの団体に所属していることになっている。私は、ひとつの組織だけに所属して人生を送っているのではなく、重層的に存在している一連の組織のいくつにも所属して生きているのである。

私が例外なのではない。すべての日本人は、老若男女を問わず、多くの重層的な組織に所属して生活している。人間のつくる組織や集団は、一人ひとりの人間の一部をとり込むだけで、一人の人間を丸ごとすべてとり込んでしまうのではないのである。では、かつての日本人はどうであったろう。農村地帯の小集落という小さな共同体だけに所属して、そこに丸ごと飲み込まれて生きていたのだろうか。そうであったに違いない、と漠然と想定し、そのことを前提にした学問がないわけではない。しかし、それはあまりにも想像力が足らない学問であるような気がしてならない。昔から、人間は、じつに多くの組織とかかわりながら生きていたのではないかと思う。人間は、しょせん、猿とは異なるのである。一人の人間を丸ごと飲み込んでしまうような共同体を、歴史のなかに求めるのは無駄な試みであろう。

アダムの子ら

人間はいくつもの集団・社会・組織に所属していることを前提にして、イスラームがもつ共同体意識を考えてみよう。ここでいう共同体とは、一人ひとりの人間のすべてをとり込んでしまう集団を意味せず、たがいに仲間意識をもっている人々よりなる集団のことである。いかなる共同体も、一人の人間にとって絶対的な存在ではないことになる。

人間の仲間意識の基盤のひとつは、いうまでもなく、

血のつながりの意識である。イスラーム社会の現実の生活では、母と子のつながりは、おおむね、強い。しかし、現実ではなく、理念の上では、父系の血縁が大きな意味をもつ。アラブ人の名前には姓というものがなくて、本人の名前、その父親の名前、祖父の名前、と父系の祖先の名前を連ねて自分を規定している。アラブ人とほとんど変わらない文化をもっていた旧約聖書に登場する人々の名前も同じである。名前、すなわち、一人の人間の社会的な存在を示す呼称は、父系の系図である、ということになる。父親や祖父、あるいはその祖先は、一人の人にとって自分の名前の一部であり、したがって自分の人格の一部なのである。父親や祖先の名誉は自分の名誉であり、父親や祖先をけなされれば、それは自分がけがされたことになる。イスラームを生んだ中東社会では、このような意識が、現実のさまざまな場面ではどうあれ、人々がそうあるべきだと考えている理念を支えている。

中東に限らず世界のどこででも、家族が社会の基本的な単位のひとつである。現実の日常生活を共にしている家族のありようは、子供の数、家族の経済状態、その他もろもろの要因によってさまざまなのであるが、理想とされている家族のありようは、地域や社会ごとにそれなりにある。現代の日本でなら、核家族が理想であろう。少し昔の日本なら、おじいさん・おばあさん、その長男とその嫁、その子供たちという三世代の家族が理想であったろう。現実には理想の家族は全家族のなかの半数もなかったにもかかわらず。さて、中東地域では、父親が健在であるかぎり、その息子たちはそれぞれ結婚して子供をもっていてもすべてが同居する家族が理想とされている。三世代・四世代の同居、しかも、長男だけではなくすべての男系の子孫とその未婚の子供の同居が、である。現実には、理想の形態の家族はほとんどないにもかかわらず、理想は理想として存在している。

また、三代前、四代前の父系の祖先を共有している集団は、集団として存在している、と意識される。その集団の構成員はばらばらに生活し、それぞれの家族をもっていても、三代前、四代前の祖先が同じ人に対しては互いに仲間であると意識し、その仲間が集まって集団をなしているのだ、としているのである。その集団は、現実の日常生活では何の機能を果たさなくても、そのような集団があるのだ、そして自分はその集団の一員なのだ、と意識される。そしてその集団はさらに、五代前、六代前の祖先を共有しているより大きな集団の一部であるとも意識される。そのより大きな集団はまたさらに、七代前、八代前の祖先を共有するもっと大きな集団の一部なのである。人々の、父系の血縁に基づく仲間意識、集団意識は、祖先の一代ごとに重層的に存在していることになる。

イスラームの歴史をひもとくと、重層的に存在している血縁意識がときに大きな意味をもっていた。部族と、一般的にはよばれている集団がそれである。十数世代も、場合によっては数十世代前の祖先を共有していると信じている人間集団が、日々の日常生活の上で機能していたわけではない。しかし、われわれは祖先を共有している仲間ではないか、というよびかけは、政治的・軍事的対決の際には有効であったのである。また、必要があって排他的な組織をつくろうとする際にも、部族意識は効果的であった。数千人、数万人はいるであろう、特定の祖先を共有する人間の全員を集めることなどは不可能なのであるが、遠い祖先を共有するという集団意識は、ある種の共同体意識なのであった。

血縁に基づく共同体意識は、一人の人間がそこにしか属さないような共同体をつくったのではない。しかし、一人の人は、理念的には重層的に存在するいくつもの、父系の血縁に基づく集団の一員であったのである。イスラーム世界の考えでは、ユダヤ教徒やキリスト教徒の考えも同じであるが、人類はみなアダムの子孫なのである。重層的に存在する血縁集団の最大のまとまりは、人類みながアダムの子ら、という集団なのである。イスラーム世界は、さまざまなレベルの血縁集団の存在を認めながら、一方で、人類はみな兄弟である、という思想を育ててきた。人種、民族、肌の色、母語の違い、その他もろもろの差異は、人間の本質にかかわりなく、人間はみな神の前では平等である、というイスラームの根本思想は、人間はみなアダムの子らであるという重層的な血縁集団意識にも支えられている。

シルシラ＝疑似的な系図

イスラーム世界にも、一見したところ閉鎖的なさまざまな集団・組織があった。神秘主義教団、任侠・無頼の徒の集団、同業者組合、などがその例である。これらの組織は、その構成員は制限され、新たに入会するためには何らかの儀式や手続きが必要であることに共通性がある。いうならば、排他的な結社なのである。秘密結社、という言葉がある。ヨーロッパの歴史のなかから見いだされた言葉で、組織の性格やその構成員は外部には秘密である組織を指している。そしてこのような秘密結社が、ヨーロッパ社会では大きな意味をもっていたし、また現在でももっている。ヨーロッパの歴史は、イスラーム世界から大きな影響を受けて展開している。ヨーロッパ社会の秘密結社の起源も、おそらくは、イスラーム世界における神秘主義教団や同業者組合であろうことは、容易に想像がつく。しかし、イスラーム世界のこれらの組織は、秘密結社ではなかった。

イスラーム世界でのこれらの組織は、その長を一般にシャイフとよぶ。シャイフとは、組織の長老ないしは長のことで、普通名詞である。つまり、組織は、特別な呼び名の権威者をもたないのである。都市の街区、村落、いわゆる部族や拡大家族、その他もろもろの組織の長老と同じ呼び名の長が、これらの組織にもいる、というだけである。それでもこれらの組織のシャイフにはなにがしかの権威がある場合が多い。そしてその権威は、シャイフが前の世代のシャイフから引き継いでいる、と意識される。この権威を引き継いだ人物の系譜が、一般にシルシラとよばれている。それはちょうど、個人の名前が父系の系図であるかのように、シルシラも固有名詞の羅列である。個人の名前、すなわち系図も、遠い祖先は伝説に由来するように、シルシラもその初代は、イスラームの預言者ムハンマドその人か彼の同世代人にまでさかのぼるのが普通である。神秘主義教団の場合であれば、ムハンマドないしはその同世代人の権威を受け継いだ人物の、それぞれの時代における当代までの系譜が、シルシラということになる。同業者組合であれば、その業界の仕事を組織化したムハンマドの同世代人から始まり、

当代にいたる系譜、ということになる。

系図の場合は、一人の祖先の子供は複数いるのが普通である。つまり、祖先から子孫へと系図をたどれば、一世代ごとに系図は枝分かれをしていくことになる。日本の家系なら、本家から分家が枝分かれすることになる。そして本家の流れが嫡流と意識され、大きな権威をもつ。ところがイスラーム世界では、子供に長男、次男などの区別はなく、嫡出、妾出の区別すらない。女奴隷の子であっても、奴隷身分から解放されれば、妻の子とまったくかわることのない権利と義務をもつのである。そうであるから、本家、分家という考えもない。シャイフの系譜も系図と同じで、一人のシャイフの弟子は一人とは限らない。系譜は、世代ごとに枝分かれしていく。そしてそこに、本流、傍流の区別はない。また、系譜の特定の流れに特別な権威もないことになる。シャイフは、日本のさまざまな芸事の家元とは大分異なる立場の権威者なのである。

イスラーム世界での、神秘主義教団や同業者組合のような結社は、どこかに本部があって、支部が広い地域に分散している、という形の組織性をもたないのが一般的である。ある系統の教団が、どの町にもあったとしても、それぞれの町の教団組織はそれぞれが自立していて、たがいに平等なのである。たしかに、教団員になるためには、多くの場合、なにがしかの儀式が必要なのだが、教団構成員の名簿が秘密である必要はなかった。儀式さえ経れば、誰でもが教団員になれ、公衆の面前で神の名を唱えながら踊ることができるのである。秘儀と閉鎖性、そして組織の階層制を基本的な性格とするヨーロッパ社会の秘密結社は、あくまでヨーロッパの特殊な社会状況から生まれたもので、イスラーム社会には、ごくわずかな例外を除いて、それらしきものはない。本部・支部、嫡流・傍流などの階層制をもたない柔構造の組織体、それがイスラーム世界における結社であった。

自由都市

イスラームは、七世紀、アラビアのメッカに生まれた。そのメッカは、一般的な考えからみれば、不思議な町であった。町には、町を代表する市長というものがいない。

町の行政を担当する当局というものがない。町の治安や防衛を担当する軍隊や警察もない。当時のメッカという町には、組織を維持するための機構が何もないのである。ではメッカは、まとまりのある組織体なのではなく、単に人間が群れているだけなのかというと、そうでもない。それなりの組織体ではあった。当時のメッカの住民は、クライシュ族とよばれている人々が中心であった。部族、という組織がこの町を維持していた、と多くの研究者は考えた。ところが、クライシュ族にも族長はいない。そこで、クライシュ族を構成している十数の氏族がしっかりした組織体で、氏族長の合議で町は運営されていた、と考えて、多くの研究者は満足した。しかし、どう史料を捜しても、氏族長という立場の人物はいないし、氏族長会議なるものは開催されていないのである。氏族と想定されたものは、重層的に存在している理念的な血縁集団のひとつのレベルでしかなかったのである。氏族もまた、現実に機能している組織体ではなかった。

目に見える制度なしに、メッカという町、あるいは都市とよんでもいいかもしれない組織体が存在していたのである。歴史研究の中心のひとつは制度研究である。その制度がないから、研究者は困ってしまった。そこで現実にはありもしない氏族長会議なるものを勝手に想定してしまったのである。しかし、制度が目に見えない組織というものはいくらでもあるのである。例えば、卒業した学校の同期会とかクラス会である。同窓会には、多くの場合、会長とかがいて、また会費を徴収するシステムがあって、それなりに目に見える制度がある。同期会とかクラス会は、たいがいの場合、誰かが勝手によびかけて集まってしまうのだが、そして定期的に会費を集めることはしないのだが、同窓会よりははるかに実質的な会合をもつ組織体であることが多い。かつて生活の多くの部分を共にしたという思い出が、制度のない、しかし、実質的には機能する組織をつくっているのである。時々勝手に集まる趣味のグループなどにも、制度のない組織はいくらでも見いだせる。そして、なによりも、実質的に日本の経済を動かしている、入札する前に談合をするような組織、独占禁止法に触れないようにひそかに価格協定をするような組織、その他もろもろのインフォーマルな、現実には存在していても制度が目に見えない組織はあるのである。

イスラームが勃興した時代のメッカは、たしかに、目に見える制度は何もなかったのである。メッカの住民は、必ずしもメッカだけに家庭をもっているのではなかった。彼らはアラビア中を股にかけて商売する商人であった。メッカで家庭をもつ男が、定期的に出かける商売先に、もう一人の妻がいて不思議ではない。そして場合によっては、メッカに帰らず、商売先の妻のもとに永住してしまっても、これもまた不思議ではない。逆に、メッカとは無縁であった男がたまたまメッカに商売に来て、メッカの女と結婚してしまうこともしばしばあった。そうなればその男は、ある期間か一生か、メッカに留まることになる。市長も市役所もないメッカは、そこから出ていくこと、そこに入ってくることになんらの制限も設けていない、出入り自由な空間であった。

メッカの人は、一人ひとり、さまざまな人と縁をもっていた。父系の血縁は、なによりも大事な縁であった。その縁によって、日常的に機能している集団を作っていたわけではないが、それは幾重にも広がっている大事な縁なのであった。現実には、父系だけではなく、母系の血縁も大事な縁であった。そして結婚相手。それは男にとっても女にとっても一人とは限らなかったが。結婚はまた、相手の父系、母系の血縁者との縁を結ぶ機会でもあった。信仰を共にする仲間。メッカには、カーバという名の神殿があり、それにともなう巡礼などの儀礼があった。メッカの人々は、アラビア中のより多くの人に神殿への巡礼を勧め、巡礼者を歓待していた。商売仲間。メッカの人は、一人ひとりが独立した商人であった。商売は、信用の貸借、現金の貸借、旅先での商品の安全保障、委託販売、商品運搬のための駄獣や労力の提供と賃金支払など、他人との無数の関係を設定してはじめて可能となる。アラビア中に良き仲間がいることが、一人ひとりにとって大切なことであった。多くの縁をもっている独立した個人が集中していること、それがメッカの魅力であり、それゆえまた人がそこに集まったのであった。

メッカが、中東の都市の例外であったのではない。都市とは元来そのようなものであった。おのずと人が集ま

ったところなのである。特定の資格をもった人だけに市民権なるものを与えるような排他的な都市は、特殊な都市なのである。おのずと人が集まるのだから、元来が出入り自由な空間、すなわち、自由都市なのである。それが自然の都市の姿なのだが、そうはいっても、現実の歴史のなかでは、自然の自由都市はそう多くはない。人が集中して住んでいれば、そこに富が集まる。その富をねらって権力者が税をかける。町には税を集める機構ができてしまう。つまり、目に見える制度ができるのがまた、歴史の必然でもあるのだ。イスラーム勃興期のメッカは、誰にも支配されず、誰をも支配しないという、歴史のなかで極めて例外的な舞台にあった。しかし、イスラームはそこで勃興した。預言者ムハンマドにとって、メッカの人々の多神信仰は非難したが、メッカ社会の多くのものをイスラームの理念にとり込んでいる。イスラームの理念では、内部に制度のない都市が、理想の都市となる。

イスラーム世界の現実の歴史のなかでも多くの場合、都市には市長もいないし、市参事会のような制度もないし、市役所もない。そして、都市から離れることにも、都市に住み着くことにも制限がない。むろん、ほとんどすべての場合、都市は何らかの権力のもとにあり、権力者に任命された何者かがいるのだが、支配や権力の維持のための制度を永続化する努力は、誰もしないのである。そして、権力者が支配のために新たに建設した都市を例外として、都市とはおのずと人が集まった場所であった。したがって、魅力がなくなれば、誰も集まらない。都市は、つねに興亡を繰り返したのである。都市という共同体は、固定したものではなく、流動的で極めて柔軟な構造の共同体であった。

ウンマ＝信仰共同体

イスラームの理念では、ムスリム（イスラーム教徒）は全体で、ひとつの共同体を構成する。それをウンマという。理想のウンマは、ムハンマドの時代にあった、とされる。ムハンマドは、メッカでイスラームを説いたのだが、メッカの人々の大部分は彼の信仰を冷笑した。ムハンマドはそのようなメッカを棄てて、メディナという場所に移住した。そのメディナの住民は、ムハンマドを中心にまとまり、大部分がムハンマドの説く信仰を受け入れた。あるときからメディナは、住民の大部分がムスリムであり、しかも預言者ムハンマドに正しく指導された町となった。この状態のメディナ社会を、理想のウンマと、イスラームの思想家はみなすのである。

理想のウンマは、スンナ派の思想家によればもうしばらくつづく。ムハンマドの死後、ムスリムの全員の合意のもとで後継者（カリフ）が選ばれ、その指導の下でムスリムはひとつにまとまっていた。初代のカリフから第四代のカリフまでは、ムハンマドのメッカ時代から彼と苦楽をともにし、彼の意志を十分に理解していた人物であるがゆえに、神によって正しく導かれたという意味で正統カリフとよばれる。正統カリフのもとでひとつにまとまっていた時代のウンマも、理想のウンマなのである。しかし、スンナ派に対抗するシーア派は、ムハンマドの死後は、彼の娘婿で従弟でもあるアリーがウンマを指導すべきであったのに、カリフがその指導権を簒奪してしまった、と主張する。したがって、シーア派によれば、不当なカリフのもとでのウンマは理想のそれではないことになる。理想のウンマは、ムハンマドの時代と未来だけにあるのである。

シーア派にとっても、スンナ派にとっても、理想のウンマは短いものであった。イスラーム世界の歴史の大部分は、ムスリム全員がひとつにまとまる、ということのない時代なのである。しかし、だからといって、ムスリムが内部でつねに宗教戦争をしていたわけではない。スンナ派も、シーア派も、教会のような特別の組織をもっていたのではない。キリスト教でも仏教でも、宗派の対立は、教会や寺院という組織と組織の対立であった。それゆえ、対立はときとして、戦いとなり、血を求めた。イスラームの場合は、宗派の対立は、組織の対立ではないのである。それは、理念の対立といってもよい。むろん、理念の対立が、政治問題となり、それがときには戦いを生むことがまったくなかったわけではない。しかし、そのような事態は例外であった。キリスト教の教会のように永続することを願っている組織を背景にした対立ならば、戦いはいわば必然なのであるが、理念の対立は、必ずしも人を戦いに組織するとは限らないのである。

理念としてのムスリムのウンマは、ムスリムだけによって構成される。その意味では、それは排他的な組織である。しかし、だからといって、イスラームが排他的な思想なのではない。ムスリムが中心となってイスラーム世界というものをつくるのが、またもうひとつの理想である。そして、ムスリムのウンマは、そのイスラーム世界において他の宗教の信者のウンマと共存するのである。つまり、ムスリムもウンマをつくるが、キリスト教徒の各宗派やユダヤ教徒もそれぞれウンマをつくり、それらの全部が共存するのが理想的なイスラーム世界なのである。イスラーム世界とは、ムスリムだけの世界を意味せずに、多様な宗教の信者の大共同体であり、そのイスラーム世界の構成要素のひとつがムスリムのウンマ、ということになる。そして、イスラーム世界全体の指導権は、ムスリムのウンマにあり、他のウンマは、ムスリムのウンマの保護下にあるのが理想である。この理想は、歴史の現実のなかで、ある程度達成されてきた。歴史の現実のなかで、ムスリムのウンマはひとつではなく、ムスリムの間で常に政治的対立があったが、イスラーム世界の一部を支配したそれぞれの帝国・王朝は、おのれの支配領域内では、ムスリムのウンマと共に、他の宗教の信者を保護してきた。

イスラーム世界のどこかで、ある都市を中心に、その周辺の小都市や農村を含めたひとつの小地域を想定してみよう。その地域のムスリムは、イスラーム法に従って生きる。イスラーム法にもいろいろな学派があるが、学派間の対立は、庶民にとってはそう大きな問題ではない。都市の大モスクはすべてのムスリムに開放されており、学派によって差別があるわけではない。第一、個々のムスリムは、何々学派の信者、と規定されているわけではないのである。この地域のムスリムは、全体としてたしかに、ひとつのウンマをつくっているのである。地域内にはキリスト教徒もいる。彼らは、宗派ごとに別々の教会に所属している。ギリシア正教会、シリア教会、アルメニア教会などにである。それぞれの教会は、小さな教区をもつ小教会、この地域の中心となる大教会などと階層化され、また地域の大教会も、地域外にある総本山みたいな立場の教会の下部組織となっている。そして、それぞれの教会の信者は、それぞれの教会の指導下で、その法に従って生きる。彼らは、それぞれの教会ごとに、ウンマをつくっている。地域内のユダヤ教徒も、ユダヤ教の教えに従って生きる。彼らもまたウンマをつくっている。以上のような地域が、イスラーム世界の歴史の現実のなかに、いくらでもあった。イスラーム世界全体としてみれば、ごく初期をのぞいて、常に政治的対立やときには戦いもあったのであるが、地域ごとには、理想の共同体は、多くの場合、実現していた。

宗教や法に基づいたウンマ、すなわち共同体は、人間の生活のすべてを支配していたのではなかった。ひとつの都市に、ムスリム地区、ユダヤ教徒地区、キリスト教徒地区などと区別され、排他的な地区があったのではない。ありとあらゆる人が、混住しているのである。商売もまた、ありとあらゆる人と共同で行う。日常生活から経済行為まで、それぞれのウンマは他のウンマを排斥してはいないのである。そしてしばしば、聖者の聖誕祭などでは、キリスト教の祭りにムスリムも参加し、またムスリムの祭りにキリスト教徒が参加している。ここでも共同体は、村や都市の地区レベルの宗教別のウンマから、小地域別のウンマ、さらに国レベルのウンマ、そして、イスラーム世界レベルのウンマという具合に重層的に存在しているのだが、どのレベルでも、人間の生活の一部分にしか影響を与えてはいないのである。

神の前では人はみな独りぼっち

イスラームの理想でも、また歴史の現実のなかにも、そして現代においても、さまざまな共同体があり、それぞれに機能している。しかし、イスラームの究極の理念では、すべての人間はみな一人ひとりばらばらに神と契約するのである。そして、天地をはじめすべてが破壊される最期の日の最期の審判で、人間は誰の助けも借りることもできないで一人で神に裁かれねばならない。そのとき、善行を積んだ人間は天国を約束され、悪行を重ねた人間は地獄へと落とされる。その判断基準は、あくまで一人ひとりの行動であって、共同体のそれではない。ある共同体の構成員はみな天国が約束されるとか、あるいは地獄が待っているとかの発想はないのである。人間

しょせん、一人ひとりばらばらなのである。

イスラームの理念ではまた、最終的な権威と権力は神にあって、決して人間や人間がつくった組織や社会、あるいは人間の思想にはないのである。人間の集団は、しょせんはこの世の仮のものでしかなく、その栄枯盛衰は必然なのである。いかなる共同体に愛着をもとうとも、最期にはみな、ばらばらに神に裁かれるのである。親族という一番硬い共同体をつくるもとである、親子の縁、夫婦の契りですら、現世での仮のものにすぎないのである。

人は、共同体に頼ってはいけない。それは、最期の審判のとき何の役にもたたない。基本的には、おのれ一人で生きていくのが、イスラーム社会の基本である。自律した個人、というものは近代西欧文明だけが生み出した、とする理解が広く存在している。それはとんでもない無知に基づく誤解である。イスラームは、自律した個人より成る社会に生まれ、そのような社会を理想とする思想体系・価値体系・行動基準なのである。自律した個人は、神とも契約し、多くの他人とも契約して、この世を生きてゆく。自律した個人間の無数の契約の総体が、人間社会なのである。結婚ですら、一人の男と一人の女の契約関係なのである。離婚とは、契約の破棄なのであり、それを見越してあらかじめ設定してある違約金を支払って、はじめて離婚となる。契約当事者の死、すなわち配偶者の死は契約の破棄を意味する。死別もまた離婚なのである。結婚とは、かならず契約の破棄、すなわち離婚をともなう契約行為ということになる。さまざまな契約の集積として、組織や集団は生まれる。そして、契約が破棄されれば、あるいは当事者が死んでしまえば、組織や集団は崩壊して当然なのである。イスラームの理念では、そしてイスラーム世界の現実でもまた、組織や集団、あるいは共同体ともいうべきものは、永遠のものではなく、しょせんは崩れるものなのであり、それに一時は頼っても、全面的に身をゆだねるものではあり得ない。

人間は、気弱になることの多い動物である。ひとつの共同体にどっぷり漬かって生きたくなる。また、そうすることが良いことだ、とする思想もある。われわれ日本人は、ともすればそのような思想をありがたがる。イスラームは、そのような思想の対極に存在している。それは、人は一人で生きねばならないことを基本としているのである。

（ごとう　あきら・東京大学教授）